

第7節 家屋画，樹木画，人物画の比較文化的検討(ネパールと日本)

藤後悦子・坪井寿子・磯友輝子・鈴木光男・田中真奈美

(東京未来大学こども心理学部)

要約

本節では，子どもの外界認知の一つとして，21世紀の子どもを取り巻く環境である環境と自然を取り上げ，これらが子どもたちの認知に与える影響を明らかにする。分析対象は，情報化の影響が少なく，かつ自然の影響が大きいネパールの子どもと，情報化の影響が大きく，かつ自然の影響が大きい長野県の子どもの家屋画，樹木画，人物画を取り上げ検討した。

その結果，ネパールの子どもの描画から①自然環境の影響が大きいこと，②子どもを取り巻く現実的な場面を認知していること，③環境と比較して自己は小さな存在として認知していることが示された。一方，日本の子どもの描画結果より，①自然環境の影響が少ないこと，②環境に対する自己を大きい存在として認知していることが示された。

キーワード

家屋画，樹木画，人物画，ネパール，幼児期の子ども

1. 問題と目的

はじめに，第3章の中の本節の位置づけを述べておく。第7節子どもの「家屋画，樹木画，人物画の比較文化的検討」の位置づけは，第3章の認知とコミュニケーションという大テーマの中の外界認知能力の側面として，子どもたちが生活する環境への認知を取り上げるものである。環境の要因としては，21世紀の社会が求められている，情報化と自然を取り上げることとした。そこで，情報化が浸透しておらず，かつ自然環境が豊かな国として，ネパールを取り上げる。また，ネパールの比較対象として，情報化が浸透している日本で，かつネパールと類似の山村部の自然環境である長野の子どもたちのデータをとりあげることにした。

子どもたちに与える環境の影響を検討する場合，子どもの描画が有効であるといえる。特に子どもたちが生活する環境の表現としては，「家屋画」「樹木画」「人物画」が代表的である。そこで，情報化社会に暮らす日本の子どもたちと，情報化が浸透していない環境にいるネパールの子どもたちの「家屋画」「樹木画」「人物画」を通じた外界認知を比較することで，環境による子どもたちの認知の違いが明らかになると考えた。

はじめに，今回取り上げる描画について説明する。日常子ども達が，楽しく絵を描いている姿はよく見かけるが，子ども達にとって絵を描くこと次のことが考えられる。まず，子ども達は絵を描くこと自体をとて楽しんでおり，自分の内面に潜んでいるエネルギーや気持ちを表現しているということである。この中の多くは言葉にできないものである(坪井，2009)。その意味で，特に幼い子ども達は，描画による表現を通して，あるときには他者の内的状態を理解し，あるときは他者とのコミュニケーションをとっていくことになる。実際，子どもたちは様々なものを描くが，普段の描画活動においても家，木，人物について描くことも少なくないと考えられる。これらは子どもたちにとって身近なものだと言える。

第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法

その一方、子ども達の絵は、子ども達のさまざまな思いを理解していくための手がかりを与えてくれることもある。絵を描いてもらうことに対してはあまり抵抗が感じられず、子どものありのままの姿が反映されやすい。この中で、子どもを対象にしたものによく用いられるのは、木や人物や家の絵を描いてもらうものがある。たとえば、いわゆる樹木画は環境への適応の様相を表すことが示されることが多い。また、人物画では、発達の様相や自己概念の形成をみていく場合にも用いられることがある。家屋では、周りの環境とかかわり、子どもたちにとって身近な家族の捉え方が反映されている。

この家屋画、樹木画、人物画は、パーソナリティ検査の中の描画法において用いられていることもある。例えば、HTP描画検査とは、バック(Buck, J.H.)によって確立されたものであり、家屋、樹木、人物を1枚ずつの紙に描いてもらうものである。このHTP法を発展したものとして、統合型HTP法がある。統合型HTP法は、1枚の紙に、家屋、樹木、人物を描いてもらうもので、それぞれの絵の配置や構成の様子をも併せて検討することができる。

本来、HTP法、統合型HTP(以下S-HTP)法は、投影法の描画法の一つであり被検者のパーソナリティの感受性、成熟性、柔軟性、効率性、および統合度やパーソナリティ、環境への適応などが反映されていると考えられている。しかし、そのためには、絵を描いてもらった子どもたちのパーソナリティの様々な側面や生活環境の様子を子どもたち本人と面接を行ったり、周りの人々から聞き取ったり、あるいは他の諸検査からの知見を総合的に検討することが求められる。

三上(1995)は、S-HTPの評価の手がかりとして次の点を挙げている。全体的評価としては、統合性、描画サイズ、付加物、遠近感、人と家・木の関連づけ、描線および形体の確からしさ、切断、修正などを検討する。人物画の評価については、人数、大きさ、性別、向き、運動、簡略化、部分などである。家屋画の評価については、大きさ、安定感、壁の面数、ドア・窓、屋根、その他の付属物など、樹木画の評価については、豊かさ、自然さ、幹、枝など検討する。

三上(1995)によれば、幼稚園年長児のS-HTPに関しては、次のような特徴があることが述べられている。「幼稚園の段階でも、すでに課題の単なる羅列ではなく、地面や空などの媒介によって、一応の統合をはかっている。まだ、遠近感はなく、2次元的な空間描写ではあるが、画用紙の縁あるいは地面の線を描いて、それを基底線として、各々が直立しているという空間概念が、幼児期の年長の時期ですでに成立しているようである。」

本報告では、ネパールの子ども達が描いた家屋画、樹木画、人物画の資料をいくつか示しながら、説明していくこととする。しかし、本研究では描画後のインタビューは実施していない。そこで、あくまでも子どもの描画そのものから推測できることの記述にとどめ、検討することとした。ネパールは、山に囲まれた自然豊かな国であるが、実際には東、西、南の三方をインドに、北方を中国チベット自治区に接する西北から東南方向に細長い内陸国である。国土は世界最高地点エベレストを含むヒマラヤ山脈および中央部丘陵地帯と、南部タライ平原からなっている。一方、ネパールの絵と対比させる日本の子どもたちの絵としては、ネパールと同様に周囲を山に囲まれた長野県の事例を参考にする。これは、三沢(2002)の「描画テストに表れた子どもの心の危機」(誠信書房)と三上(1995)「S-HTP法—統合型HTP法の臨床的・発達のアプローチ」(誠信書房)に収められている絵である。なお、対象事例としての日本の描画は、1981年の長野県と1998年の長野県の小学生の描画を選んだ。1998年のみでなく1981年をも取り上げたのは、

情報化がそれほど浸透していない時期である 1981 年の長野県のデータがよりネパールのデータに近いと考えたからである。また長野県のデータは残念ながら小学生を対象としているものであり、そのため参考までに本研究と同じ年齢の対象者の日本の子どもの絵を資料として最後に添付した。

以上より、本節では、子どもの外界認知として、子どもたちが幼少期から表現する機会が多い、「家」「木」「人物」を取り上げ、子どもたちが生活している外界をどのように認知しているかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者

ネパールの 4 歳～5 歳の幼児

(2) 分析対象の絵の枚数

描画の内容を概観し、形の判別が可能であったネパールの子どもたちの S-HTP 10 枚 (ただし、HTP の人物が鮮明でなかったものも含めて 10 枚とした)

(3) 協力校

ネパールのカトマンズ市内の私立学校 Holy Garden Boarding School

(4) 実施期間

ダクチュウ 2009 年 12 月 26 日

カトマンズ 2009 年 12 月 28 日

(5) 実施方法

三上(1995)の実施手順に沿って行った。はじめに「家と木と人を入れて、一枚の絵を描いてください」と教示し、自由に絵を描いてもらった。

(6) 分析方法

臨床心理学の専門家 2 名、教科教育図工の専門家 1 名、異文化教育の専門家 1 名により、描画内容を確認し、検討した。また S-HTP による先行研究をもとに、統合性、家屋画のサイズなどを検討した。

3. 結果と考察

(1) 全体構成

S-HTP の評価基準としては、通常細部の記載は省略されることが多いので、全体の評価を主に行う。全体の評価の視点としては、三沢(1995)によると、統合性、描画サイズ、付加物、遠近感、人と家・木との関連付け、描線および形体の確かさ、切断、修正などが挙げられている。

今回分析対象となった S-HTP の特徴をまとめたものが Table1 である。Table1 に示す通り、ネパールの子どもたちの統合性では、「媒介による統合」が 50%、「やや統合」が 50%、遠近感では、「ややあり」が 50%、「直線(重なりあり)」が 40%、描線では、「とぎれのない 1 本線」が 80%、描画サイズでは、「HTP で 4 分の 1 以下」が 60%、課題以外の付加物は、「あり」が 90%、地面の描写は、「なし」が 80%、非現実的・現実的描写では、「現実的描写」が 100%であった。ネパールの子どもたちの絵の様子をまとめると、媒介による統合がややあり、とぎれのない 1 本

第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法

線で描かれており、描画サイズがHTPで4分の1以下が過半数であり、課題以外の付属物があり、地面の描写はなく、現実的描写で描かれているという結果が示された。

同じような山村部の日本のデータとして、長野県で1998年に実施したS-HTP（三沢，2002）と1981年に実施したS-HTP（三沢，2002）を比較対照とする。長野県のデータは、小学生を対象とした結果のため、幼児と年齢が近い小学生低学年のデータを参照することとする。分析対象の人数は、1998年は96名、1981年は124名であった。また、都会の子どものデータとして1997年のデータも参照した。

日本のデータとネパールのデータを比較した結果、いくつかの特徴が示された。例えば、遠近感、ネパールの子どもたちに多く示された。描画のサイズはネパールの子どもたちが小さめで日本の子どもたちは大きめであった。地面の描写は、ネパールの子どもたちは、「なし」が多く、画面からはみだしは、ネパールの子どもたちでは示されず、日本では、木と家が多かった。現実的な描写は、ネパールの子どもたちと1981年の長野県が多かった。

三沢（2002）によると、「統合性」の項目は、描画全体に関わる総合的な評価項目でありS-HTPの分析には重要な項目である。今回の結果では、ネパールがより統合的であることが示されたが、これは、サンプル数の偏り、評価者が長野の場合と統一されていないため、信頼性が高いデータであるとはいいがたい。しかしながら、少なくとも幼児期の子どもたち全員がある程度の統合性のある絵を描いたということは意味があるといえる。また遠近感が「ややあり」の子どもがネパールでは過半数を占め、現実的描写に関しての割合も高かった。これらの結果を外界認知と関連して考えるのであれば、子どもたちは、家屋画が象徴する家族や地域、樹木画が象徴する環境への適応などから、外界環境を現実的、かつ実在感を持ってとらえていることが考えられる。

Table 1 ネパールと日本の子どもたちのS-HTPの特徴

項目	下位項目	ネパール (N=10)	長野 (1998年) (N=96)	長野 (1981年) (N=124)
統合性	羅列的	0.0%	0.0%	0.0%
	やや羅列的	0.0%	6.3%	6.5%
	媒介による統合	50.0%	74.0%	55.6%
	やや統合的	50.0%	19.8%	37.1%
	明らかに統合的	0.0%	0.0%	0.8%
遠近感	ばらばら	0.0%	3.1%	0.0%
	直線(重なりなし)	10.0%	28.1%	25.8%
	直線(重なりあり)	40.0%	27.1%	37.1%
	ややあり	50.0%	27.1%	25.0%
	中	0.0%	14.6%	12.1%
	大	0.0%	0.0%	0.0%
描線	とぎれのない1本線	80.0%	78.1%	91.1%
	とぎれとぎれの1本線	10.0%	0.0%	2.4%
	複数線	10.0%	1.0%	2.4%
	スケッチ風の線	0.0%	20.8%	4.0%
描画サイズ	全体で4分の1以下	0.0%	0.0%	0.0%
	HTPで4分の1以下	60.0%	1.0%	0.0%
陰影付け	陰	0.0%	0.0%	0.0%
	影	0.0%	1.0%	0.0%
課題以外の付加物	付加物あり	90.0%	97.9%	89.5%
地面の描写	なし	80.0%	54.2%	67.7%
	部分	20.0%	12.5%	6.5%
	全体	0.0%	33.3%	25.8%
現実的・非現実的描写	現実的	100.0%	87.5%	94.4%
	混合	0.0%	5.2%	5.6%
	非現実的	0.0%	7.3%	0.0%
画面からはみ出し	人	0.0%	2.1%	7.3%
	家	0.0%	6.3%	15.3%
	木	0.0%	13.5%	14.5%

(2) 家屋画の特徴

次に家屋画の比較であるが、ネパールの子どもたちの家屋画の面積の平均は、72.21m²であり、日本の1997年代の子どもたちと比較しても小さかった。日本の人の大きさは、1981年と1997年とを比較すると同じであるのに、家の大きさはTable 2の通り1997年が1981年より小さくなっている。現代の子どもたちにとって、「家」を象徴とする家族や地域や社会から与えられるベ

き精神的な支えや温かさが以前と比べて三分の二以下になってしまったと三沢（1998）は指摘している。日本の子どもたちの描画の変化を参考に考えるならば、今回のネパールの子どもの家々の小ささをどのように解釈すべきであろうか。ここで、注意すべき点としては、ネパールの子どもの人物像の小ささである。つまり書かれている「家」の面積は、あまり大きくないものの、描写されている人物を基準とすると「家」の面積は6倍～10倍であり、日本の子どもと比較して、「家」がもつ意味は大きいと推測される。また、ネパールの子どもの絵の特徴としては、60%の子どもが家の後に大きな山の連なりを描いている。

以上のことを総合すると、ネパールでは人物像が小さく、それと比較すると「家」は大きい、またその「家」をさらに包み込む存在として「山」が位置付けられている。つまり自分たちを取り囲む自然の大きさに比較したら、家や自己というのはとても小さい存在として認知されているのかもしれない。言い換えるならば、自然という大きな環境の中では、家族も自己もその自然をコントロールできるような力ではないという認識があるのかもしれない。もちろん、人物像を基準とした家の大きさは、実物の家の大きさも影響していると考えられるが、やはり子どもにとっての家族や地域の影響力が大きいという解釈も成り立つものだと考えられる。ゆえに子どもにとって家族や地域は大きな存在であるが、それ以上に自然の影響力が大きいという解釈が可能なのかもしれない。

また、ネパール社会の中での子どもの位置づけも留意する必要がある。日本のように幼少期の子ども的人物が大きいということは、単に発達過程の自己中心性を示しているのみでなく、社会の中の子どもとしての子どもに過剰な期待や価値を置き、いわゆる自己愛の増大を促進させているのかもしれない。それに比較して、ネパールの場合、子どもは家族の中では労働力という視点からも半人前であるという認識があり、それを子ども自身も感じているのかもしれない。

Table 2 日本の子どもたちの家屋画の面積（三沢，1998）

		1981年 面積(m ²)	1997年 面積(m ²)
1年	男	130.6	90.6
	女	115.2	148.6
	計	123.3	120.6
2年	男	160.4	95.6
	女	137.5	92.7
	計	149.7	94.3
3年	男	136.3	107.4
	女	173.7	80.1
	計	153.8	92.4

(3) 自然との関連

最後に、ネパールの描画に示されていた「山」の描画について、さらに検討する。第6節の「自然への認知」について、視覚的刺激と聴覚的刺激によるフィジーの子どもの沖縄の子どもの比較を行った。その結果、両者ともに、山ではなく生活に密着している「海」に関する単語の種類や詳細さが特徴として示された。一方、山に囲まれているネパールと長野の子どもの絵を

第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法

比較した結果、ネパールの子どもたちの描画に「山」が出現する率が非常に高いことが明らかになった。今回の実験の協力校としては、ネパールではカトマンズとダクチュールの学校それぞれ1校ずつであった。ダクチュールは、いわゆるネパールの中でも山村部に位置するがカトマンズは平地で、街中に位置し、周囲に山が見える土地でもない。このような条件の違いにも関わらず、一般的に5歳児ぐらいから見られる基底線を地面に描くのではなく、ネパールの子どもらは山の稜線を基底線にしていた。このような基底線は、日本の子どもたちには通常は見られない。これは、カトマンズだけではなく、山の中の村ダクチュウでも同じ傾向だった。彼らの大地の認識に、見える・見えないは関係なく「山」は欠かせない存在なのであろう。

ネパールの子どもたちと同じように、長野県の子どもたちの絵にも山の描写は示されたが、その頻度は少なかった。また長野県の子どもたちの山に関連した1981年代と1998年代の絵を比較すると、1981年代では日常生活の風景として「山」が示されているものの、1998年代では、キャンプのような場面など特別なイベント場面が描かれていた。このような結果から、ネパールの子どもの方が、より自然と密着して生活しており、日本の山村部の子どもは、子ども自身の生活の中に「山」を意識することが少ないのかもしれない。それは、現在の日本の子どもたちの生活を考えた際、情報化と少子化が進んだ結果、山村部では、友達の家に行くのに時間がかかり車を使って移動したり、家の中でゲームやビデオなどを見て過ごしている子どもが増えているという汐見（2008）の指摘からも推測できる。

（4）描き方の特徴

また、S-HTPの特徴と直接関係はないかもしれないが、ネパールの子どもたちと日本の子どもたちの絵の特徴として、いくつかの視点が示された。もちろん全て文化による違いに帰属することはできないが、基底線のちがひ、草の描き方、花の茎の部分の折れ方、樹木の根元の部分、家のドアの描き方などは、日本の子ども達の描くものとはかなり異なる印象を持っている様相を受けた。ネパールの子どもたちと日本の子どもたちの絵の描き方について、図画工作の教科教育の教員から、以下のコメントが示された。

- ネパールの子どもの表す屋根の記号は台形が基本となっており、日本の子どもは三角形として示されている。加えて、日本の子どもは「屋根ですよ」と表すのに、煙突も描き添えている。日本の家屋で煙が出る煙突があるというのはごくごく稀で、ほとんど無いに等しい。
- 家の窓と扉が殆ど1つずつである日本の子に対して、ネパールの子らは扉を挟んでシンメトリーに左右に1つずつ計2つ窓を描く傾向にある。日本人には、家の記号として窓と扉是一对というのが定着している。
- 樹木の描き方では、日本の子どもらは幹と葉というように分化されて認識されているが、ネパールの子らは分化せず一体的に捉えられている。
- 5歳児ぐらいから見られる基底線に関しては、ネパールの子どもらは山の稜線を基底線にしている。このような基底線は、日本の子どもたちには一般的には見られない。

このように外界認知の一つとして、家屋画、樹木画を取り上げてみても、家、木という同じ概念のものを認知していてもその表出内容に文化差が示されたことは興味深い。

第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法

以上、本研究では、ネパールの子どもたちの絵と日本の子どもたちの絵を比較しながら、子どもの外界認知について述べてきた。本研究から得られた結果を大きく次の4点にまとめた。

①ネパールと長野県という同じ山村部の子どもたちの絵を比較した結果、ネパールの子どもたちのほうが、「山」という自然環境を日常生活の中でより認知している。

②日本の子どもたちは、自然環境をあまり生活の一部として認知していない傾向にある。しかし1981年の方が、より日常生活の中で「山」を意識し、1998年の方ではキャンプなど特別なイベントの際に「山」を意識しているようであった。ネパールの子どもたちと比較して、情報化の影響から子どもたちは山村部であってもゲームなどの室内遊びが多いこと、生活の中で自然と関連する労働を期待される機会が少ないことが本結果に関連すると思われる。

③日本の子どもたちは、ネパールの子どもたちに比較して、人物像や家屋像が大きいため、自己への自信や家族の支えの重要性を認知していた。同じ長野県では、情報化が進む以前の1981年の方が、より家族や地域を象徴する家屋画が大きかった。一方、家屋画に比較した人物像の大きさは、1998年が1981年に比較して大きく、これは子どもの自己中心性や自己愛的な自己認知傾向の増加と関連するかもしれない。

④ネパールの子どもの自己像が小さい理由としては、家族や自然という子どもを取り巻く環境の力が巨大でありその影響力がとても大きいこと、またネパールの社会の中での子どもの位置づけが低いことなどが関連することが考えられた。

以上、これらの結果を一つの仮説として、さらなるデータ数の確保や文化的違いをも踏まえながら、今後の発展的研究が期待される。

4. 引用文献

- 三上直子 1995 S-HTP法—統合型HTP法の臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 三沢直子 1998 殺意をえがく子どもたち 学陽書房
- 三沢直子 2009 総合型HTP法を子どもの心理検査として有効利用するための基礎研究,
明治大学人文科学研究所紀要 第65冊 (2009年3月31日) 293-338
- 三沢直子 2002 描画テストに表れた子どもの心の危機 誠信書
- 汐見稔幸 2008 子どもの身体力の基本は遊びです—汐見先生の素敵な子育て 旬報社
- 高橋雅春 1974 描画テスト入門 文教書院
- 坪井寿子 2009 トピック6 絵からのメッセージ 藤後悦子(編)保育カウンセリング
ナカニシヤ出版 32-33

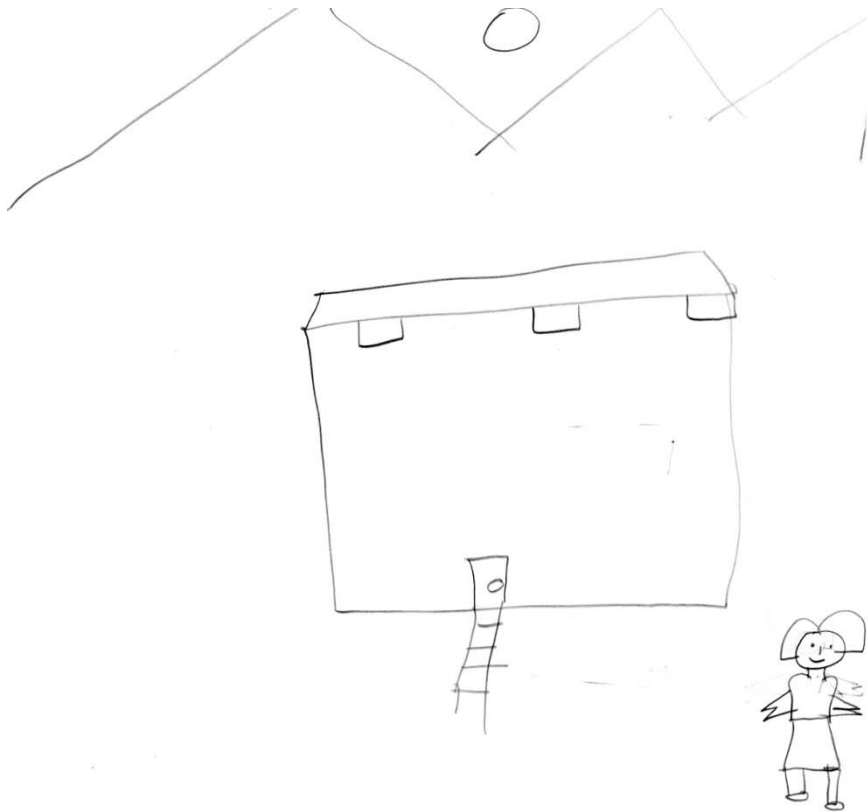


Figure 1 ネパールの子どもの家屋、樹木、人物の描画（その1）



Figure 2 ネパールの子どもの家屋、樹木、人物の描画（その2）



Figure 3 ネパールの子どもの家屋、樹木、人物の描画 (その3)



Figure 4 日本の子どもの家屋、樹木、人物の描画(三上 1995より引用)